

矢作川流域で確認されたホソカワモズク *Paludicola turfosum*

*内田朝子（豊田市矢作川研究所），
洲澤多美枝，洲澤 謙（有限会社河川生物研究所）

1. はじめに

カワモズク類を代表する淡水産紅藻の仲間は湧水でよく見られるなど、きれいな水の指標とされている。矢作川流域では、2007年12月、本流（古巣公園横）でチスジノリが確認された（上西 実 氏 龍谷大学）のを期に広域に調査したところ、本流でチスジノリとアオカワモズクの2種が、支流でチスジノリ、オオイシソウ、アオカワモズク、チャイロカワモズクの4種が確認された（洲澤・矢作川研究所 未発表）。このうち、アオカワモズクは、当研究所で実施している水生生物調査において阿摺ダムや明治用水頭首工の下流部でしばしば確認されている。

2. 生育状況

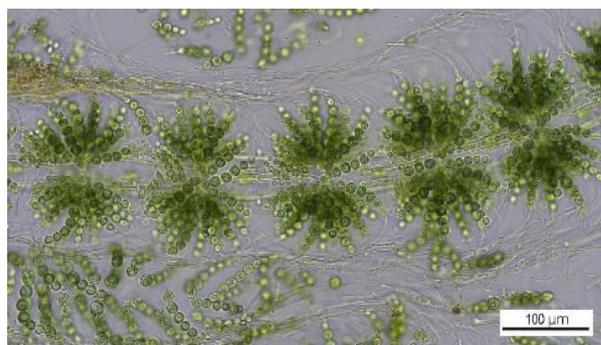
今回は、2024年11月、愛知工業大学の内田臣一博士に提供を受けたカワモズクについて報告する。このカワモズクは豊田市の丘陵地の小川で確認されたもので、ホソカワモズク *Paludicola turfosum* と同定された。本種は、環境省のレッドリストでVU（絶滅危惧II類 絶滅の危機が増大している種）に指定され、典型的な高地湿原と低地の湧水湿地に生育するとされている（環境省 2014, 2020）。津田（2017）は、本種を東濃地域の貧栄養湿地で確認しており、環境変化により人知れず消滅する危機感を示している。愛知県および豊田市のレッドデータブックでは、藻類は調査の対象とされていないため、希少性の高いカワモズク類であったとしても記録されない。そのため、里地里山の開発や保全を行う際にカワモズク類は見落とされる可能性がある。愛知工業大学の調査によると、確認された下流部では3面護岸が施されており、人手の入ったその部分ではホソカワモズクは確認されなかったという。このことから、本種は人為の影響が及んでいない自然度の高い環境を好むと考えられる。今後、保全対策を講じるには生育情報を



生育地の様子

関連する行政機関で共有する必要がある。

カワモズク類の分類は、形態学的特徴を基に行われていたが、1990年代に分子系統学的な解析が導入され、カワモズク属に多くの系統が含まれることがわかった（仙田ほか 2022）。ホソカワモズクは Vis et al. (2020) に従い、カワモズク属 *Batrachospermum* から *Paludicola* 属に移されている。現在、分類体系の整理途上にあるため、新旧の学名の対応に注意がいる。



顕微鏡写真